「ぷるがたうりよ」のひとびと

加地　尚武

少女は、暗い四角の中心にいた。
長辺が五十間もある広大な矩形の中には、少女の他にも五千人以上の男女が暮らしていた。
少女は、入れ子になった升のように、大きな四角の中にあるさらに小さな四角の矢倉に、たった独りで座っているのである。
五寸ほどの小さな明かり取りから、ひとすじの光が差し込んでいた。
朝、なのだろう。少女は顔をあげた。冬の弱い光が彼女の顔を照らした。
かつては、丸く愛らしい顔立ちであったが目の下にできた淡い隈のせいで、

ひどくやつれて見える。
少女の手には、コンタツ（数珠）がかたく握りしめられていた。
彼女にそれを授けたイルマン（修道士）とは、もう長いこと会ってはいない。おかげで、汚らしいちりあくたが一年分も腹の中に溜まっているような気がしていた。パアデレ（司祭）に来てくれとなどという贅沢はいわない、せめてイルマンにこの胸の内をさらけだしたい、と彼女は思っていた。
かなうはずもない望みであることは、少女にもわかっている。まわりの数千という人々は、ほとんどが阿弥陀仏を信じているのだから。少女とおなじデウス（天主）を信じる者たちもわずかにいたが、注意深く彼女から遠ざけられているのだった。
外の国から――たとえば摂津国から、イルマンが城の矢倉の中に閉じ込められている少女のもとにふらりとやってくるなどということはあり得ない。この城そのものが閉ざされているからだ。内からも、外からも。
少女は視線を落とした。床の上に明かり取りから降り注ぐ光が、斜めに歪んだ四角をつくっている。羽のある小さな虫がゆっくりと光に向かって這っ

ていた。
御身は、ここに遣わされた「アンジョ（天使）」なのですか。
少女は羽虫を凝視しながら、こころの中でそう問うてみた。
答えはない。その虫は寿命が尽きかけているのか、ただのろのろと這っていく。
声が聞こえる。
筆頭家老が百姓たちを怒鳴りつけている声が、少女のいる暗い部屋の中に響いてきたのだ。その武士らしい野太い声は、しんとした冬の空気をぶるぶるとふるわせている。
空壕に捨ててあった死体の太ももの肉を、きのうの夜、だれかがそぎ落としていることを、きびしくとがめているようだった。
少女はとっさに小袖の袂で耳を押さえた。目を閉じてみるが、あの家老の沢蟹のような顔が、頭いっぱいに広がっていく。こわい、と思った。家老たちの中で、あの人物――三宅肥前守が、いちばんおそろしい。
少女は暗い部屋の中で、ゆっくりと頭を巡らす。この狭い部屋に自分を閉

じ込めたのも、肥前守が殿に進言したからにちがいない。少女はそう思い込んでいた。

「部屋」といっても、この城の中に建てられた矢倉の一室である。少女は、予備の具足や矢といった物どもと同じように、しまいこまれていたのだ。

一日に二度、丹波国からいっしょにやってきた侍女が食事を運んでくるのだが、そのひとときがほとんどゆいいつ、他の人間と言葉を交わす機会だった。それがなければ、少女は自分が床几か指物にでもなったような気がするところである。

少女の名は於尚（おひさ）といった。

この城が包囲される直前に、この城の一族の若者に嫁いできた。

「尚姫様……」

侍女の声で彼女は家老の声が止んでいることに気がついた。

声のした方向に視線を向ける。物心がついたころから一緒だった侍女が、

矢倉の階段から顔を出していた。まるで床の上に生首だけが置かれているようだった。

於尚の脳裏に、なまなましい光景がよぎる。この城にきて間もないころ、身方があげた首級をていねいに洗って化粧を施すという作業を手伝ったことがあるのだ。「手伝う」といっても形だけのことであったが、ずらり並べられた数十の生首の視線を忘れることができなかった。

侍女は、もういちど「姫様」と少女を呼ぶ。

なんど注意されても、その侍女は少女のことを「姫」と呼ぶのだった。侍女は乳母の子だった。姉妹のようにいっしょに育ったが、姉妹のようには打ち解けなかった。

少女は侍女にうなずいてみせる。

「今日は、これだけしかありませぬが……」侍女はそういいながら彼女の目の前に膳を置く。

膳といっても、ほとんど白湯に近い透明な汁に、皿のうえに申し訳なさそうに盛られた干し飯を焼いたもの、そしてスルメイカの干し物、それだけで

あった。

「……あぐり、おまえ、いくらかお食べ」少女は侍女の名前を呼んだ。

あぐりと呼ばれた侍女は、傍目にわかるほどにうろたえた。侍女の唇の端が別の意志を持った生き物のようにぴくぴくと動いた。

「ぜ、ぜんぶ、召し上がらなくてはなりませぬ。……『北の方』に叱られます」あぐりは自分に言い聞かせるように答える。

「すこしならば、よいではないか。……ひもじかろう？」

於尚がそういうと、あぐりは目をふせた。床についた指先が細かくふるえている。

「遠慮せずに、さ、お食べ。このことは内緒にしておくから」少女は重ねて言った。

あぐりはだまっている。

「この尚のいうことがきけぬか」少女は、侍女が部屋を立ち去ろうとするそぶりをみせたので、とがめるように言った。

「ぜんぶお召し上りくださいませ……お腹の子のためですっ」あぐりはそう

言い放つと、立ち上がり、トントンというかすかな音を立てながら、下に降りていく。

戸が外から閉められる音がした。

於尚は立ち上がり、小窓から外を見た。矢倉から離れていくあぐりの後ろを、二人の小者がついて行くのが見える。

あぐりが言われるとおりに食事に手をつけていたら、どうなっただろう。於尚は想像する。

斬られたかもしれない。

侍女のあぐりが一太刀のもとに切り捨てられる光景がふいに浮かんだ。手を下すのは、むろん三宅肥前守である。肥前守の沢蟹のような顔には悪鬼のような表情が浮かんでいる。そして、太刀の切っ先が、あぐりの小袖の背中を切り裂き、真っ赤な血しぶきが座敷のふすまに飛び散るところまで見えた。

恐ろしいような、しびれるような感覚が、ゆるゆると少女を酔わせた。

しばらくして、於尚は粗末な膳に向き直り、食べ始めた。あっという間に

食べ終えた。ぜんぜん足りない。「お腹の子のため」、毎日あぐりはそう言うが、この食事はひとりぶんにもとうてい満たないのである。

だが、死人の太ももを削いで食わなければならない人々からしてみれば、たいへん贅沢な食事であろう。於尚にはそれがわかっていた。そして、侍女のあぐりは彼らよりもほんのすこしましな食料しか与えられていないことも知っていた。

だが、足らない。とうてい足りはしない。このひだるさがわらわのスピリツ（精神）をむしばんでいくのだ。於尚は膳の横のあたりをいまだに這っている羽虫をひとさし指で押しつぶした。虫の体液が雨のしずくのように黒くひろがる。

少女は妊娠していた。

時は死にかけた羽虫のようによろよろと過ぎていく。

於尚は毎日のように侍女のあぐりに食事を分け与えようとして、あぐりはそれをかたくなに断り続けた。それは主従の情愛の現れというよりも、ただ

の女の意地の張り合いのようにみえた。
あぐりにとっては、命がけだった。本城の矢倉に於尚が軟禁されていることは城内に知れ渡っていたし、日に二回もの食事をあぐりが運んでいることもみなの知るところだった。「つまみ食いをしておるのではないか」と口に出していうものはいなかったが、飢えた人々の視線が、あぐりを炙るように痛めつけていた。
「今日はこれだけでございますが」いつものようにあぐりは於尚の前に膳を置く。
「いくらかでも、食べぬか？」いつものように於尚が言う。
「いえ」いつものようにあぐりは首を振る。

いつの頃からか、「夜」がなくなっていた。
日が暮れるとともに、空ぜんたいが燃え上がるように明るくなるのである。
この城は、大地に釜を伏せたような山を利用して築かれていた。この城か

ら五十町ほどはなれた場所に城を見下ろすように小山があり、敵の本陣はそこにある。そして、その小山を中心にして、おびただしい砦が築かれていた。

それら攻城戦用の砦は、「付城（つけじろ）」と呼ばれている。夜になると、三十あまりの付城には、それぞれ松明が灯された。松明の光は集まり、夜空を明るく焦がすのであった。

明るい夜空に比べて、城内は暗く、於尚のいる矢倉はさらに暗かった。

板間の上に敷かれた畳の上に横たわりながら、於尚は頭上の明るい四角を見上げていた。本来ならば星の一つも見えるはずなのだが、空が明るすぎてなにも見えない。ただ、かろうじて、桃色に見える月だけがおぼろに浮いているのだった。

目を閉じ、目を開ける。

昼もなく、夜もない。刻（とき）もなければ、城もない。この世には四角いこの部屋と、あの明るい窓しかない。敵の手により、あるいはあの家老によって、

首をはねられるまではひたすらこの四角の中で過ごさねばならないのである。於尚は、その日――この部屋から出されて殺される日――を待ち遠しく思っている自分をみつけた。

そのとき、腹の中の子が動いたような気がした。

於尚は腹をそっとなでる。

暦の上では、いつなのだろうか、数日後、於尚はふとそう思って、あぐりにたずねてみた。

「……師走の二十日でございます」あぐりは低い声で答える。

「師走……。いつの師走じゃ」

「は？」

「いつの師走かと問うておる」

「……己卯（つちのとう）（天正七年）の師走でございます」あぐりは答える。

「すぐに年が明けるのう」於尚はつぶやくように言った。

「はい」あぐりはうなずいた。
「……年が明ければ羽柴筑前守が、この城を攻め落とす」於尚は言った。
「そ、そのようなことはございませぬ」あぐりはあわてて首をふる。
「なぜじゃ？　……もはや、このいくさの大勢は決しておる。蟻一匹出入りできぬようびっしりと取り囲まれたうえに兵粮は尽き、西国の毛利どのはけっして後詰めには来ぬ。……この城は、落ちる。そして、城内の者どもはみな羽柴筑前に『根切り』にされるのじゃ」於尚は、低く静かな声で言った。
「およしください、尚姫さま。そのようなことをおっしゃってはなりませぬ。彦之進さまがお聞きになられたら――」
「よい」於尚はあぐりの言葉をさえぎった。「彦之進さまがどのように思われようが、もう終わりじゃ。なにもかも、終わったのじゃ」於尚は首を振る。
　あぐりはだまっていた。於尚は膳の前で首を垂れている。あぐりはやがて頭を下げ、よろよろと階段を下りていった。

「なにか、かわったことはないか」初老の男の低い声が響く。
あぐりは平伏したまま考えていた。どのような答えを、目の前いる筆頭家老の三宅肥前守は望んでいるのだろう？
「どうした。答えぬか」上座にいる「北の方」が、黙っているあぐりをうながした。
「は、はい」
あぐりは顔をあげる。「北の方」がいた。むろん目を合わせることはできない。四人の子の母となっても、一年あまりの籠城のさなかにあっても、そのひとは、宝玉のようにまばゆかった。城主たる別所小三郎さまも、その正室の北の方もそろって美しい。この東播磨のひとびとは、武勇と領主夫婦の美貌が自慢であった。
「と、とくおかわりもなく……」あぐりは目を伏せたまま、そう答えた。
寒い朝、彼女が伏せている板間は霜がおりたように冷たかった。だが、その冷たさのおかげで、膿んだ刀傷を思わせるひだるさの、じくじくした痛みをまぎらわせることができた。

「まことか」筆頭家老はきつい声で言った。
「はい」あぐりは額を床にこすりつけるように伏した。
「……それでは主人をかばい立てすることにはならぬぞ」あぐりに向かって北の方の涼やかな声が降り注ぐ。
「正直に申せ。……おまえを責めておるのではない」あぐりがすぐに答えないためか、北の方は、重ねてやさしく言った。
「……それが……」あぐりは平伏したまま口を開く。「いつもとおかわりはなく、お腹のお子も――」
「たわけ」筆頭家老があぐりの言葉を荒々しくさえぎった。
「常人とかわりがないならば、あのようなことが起きるわけがなかろうっ」
「肥前どの」北の方は手を挙げいきりたつ家老を抑えて、「あぐり、そなた、こわくはないか」と声をかける。
「他の女房はみな、こわがってあの矢倉に近づこうとすらせぬ。乳母子（めのとご）の侍女としてともに丹波からこの播磨に来た身、かばいたい気持ちはわかるつも

りじゃ。しかし、正直に話してはくれぬか。それが於尚のためでもある」とやさしく言った。

間があった。

じれた肥前守がうながそうとしたせつな、あぐりは顔を上げ、口を開いた。

「尚姫さまは……天狗に取り憑かれておられます」あぐりは低い声で言った。

あぐりの位置から肥前守と北の方が、「やはり」といったふうに顔を見合わせるのが見えた。あぐりは自分の上唇をなめる。ひどく、喉が渇いていた。

「天狗と申したが……その……見たのか」

「見たのか、ともうしますと……」あぐりは家老に首をかしげてみせる。

「じゃから、その『天狗』とやらの姿が見えたのかと問うておる。それとも、夜ごとにあの矢倉の周りを飛び回っておる白いものが、天狗か」

ふたたび、間があった。

「どうした」
「外にいるのは、おそらく天狗の眷属（けんぞく）、大天狗は内にいます」あぐりは家老に答える。
「内……うちとは、矢倉の中か」家老は言った。
あぐりはゆっくりとうなずく。
「で、その姿を見たのか」
「……いちど、立っておるのを見ました。姫のお近くに……童のよう背丈をしておりました」
「童……どのような童じゃ」肥前守が重ねて問おうとするのを制して、北の方があぐりに尋ねる。
「それが、ぼんやりとしておって……三つか四つの子が、変わった衣をまとっているようでございました。座っておる姫様の後ろに立ち、姫様を見下ろしておりましたが、あぐりが物音をたてると……蝋燭の灯のようにふっと消えましてございます」あぐりは答えた。
「もしや、於尚の体の中にいる、ということなのか……」と、北の方はおも

おもしく言った。
　あぐりは伏せたまま、かすかにふるえた。
「か、体の中というと、も、もしや、その……お腹の……」肥前守は北の方に顔を向け、うろたえるように言った。
「……そのほう、いつごろから、それが於尚に取り憑いたと思う」静かな座敷に北の方の低い声がひびく。
「ご懐妊あそばしてから、尚姫さまは急に変わられました。――幼きころから知っておりますゆえ、わかるのです」あぐりは「北の方」に顔を向けてそう答える。
「伴天連どもによからぬこと吹き込まれたのではあるまいか」
「いいえ。このことは、デウスの教えとは関わりがありません。姫さまはそう思っておわれますが、ちがうのです。この播磨に嫁ぐことが決まったころから、姫さまは、人には見えぬものが見えだしたり、聞こえるはずのない声が聞こえだしたり……それに」あぐりの言葉はそこで途切れた。
「それに、なんじゃ？」

「……あるとき、姫様は、『客星（きゃくせい）が腹に入っていく夢を見た』とおっしゃられました。そのあとすぐにご懐妊の兆候があったのです」

そういってあぐりは顔を上げ、北の方と家老の三宅肥前守の顔を交互に見た。ふたりとも怪訝な表情を浮かべている。

「きゃくせい……とな？」

「ほうき星のことでございます」あぐりは首をかしげる家老に言った。

「その、ほうき星がお腹に……」

「肥前どの、『平家物語』をごぞんじか」突然、北の方が家老に顔を向けて言った。

首を振る家老に、北の方は、平家物語の冒頭にある場面を引用する。それは無数の天狗たちが「よろぼしみばや」とはやしたてながら京に向かって飛んでいくというものだった。

「よろぼし」は、謡曲の題名でもある「弱法師」ではなく「妖霊星」という不吉な漢字があてられる。世が乱れるときに、空に現れるほうき星を意味し

ていた。
　あぐりはひれ伏したまま、二人が天狗について語りあうのを聞いていた。座敷にはあぐりを含めて三人しかいなかった。低い家老と声と高い北の方の声が、ツタのようにからみあって、がらんとした座敷を覆い尽くすように広がっていく。
　あぐりはふたたび唇をなめた。こころの中に、井戸に行って水をくみ上げる自分の姿が浮かんだ。
「このようなことを、殿に申し上げるわけにはいかぬ」家老に向かって、北の方は声をひそめるようにして言った。
「……このさき、この城が落ちることがあろうとも、武門の誉れ高き別所家の名を汚してはならぬ。……城主の実弟の正室が、正室の腹の子が、物の怪に取り憑かれておるなどということを、織田方に悟られてはならぬ」
「はっ」三宅肥前守は「北の方」の言葉に頭をさげた。
「……たとえそれが、僻事（ひがごと）であろうとじゃ」彼女はあぐりを見下ろし、「あぐり、つらいかもしれぬが、このまま於尚の様子をみていてはくれぬか」と

言った。
「はい」あぐりは答える。

広大な城にはいくつもの井戸があった。
城は大きな川のほとりに築かれているため、さいわいなことにどの井戸も涸れてはいなかった。だが、空腹を紛らわせるために生水をがぶ飲みしたあげくに頓死するものが幾人も出たため、それぞれの井戸には見張りがたてられている。
「お許しがある者以外は使えぬぞ」主殿の近くにある井戸の見張りをしていた足軽の一人があぐりに声をかけた。
あぐりは顔を上げ、自分と同年代のその足軽を見た。その若者は、干上がった沼地のように窪んだ土色の顔をしている。空腹のせいで重い具足を付けて立つ力が出ないのか、素肌の上に汚れた湯帷子を何枚か重ねて羽織っているだけであった。彼と対になるように立っている中年の男は、地面に突き立てた槍にしがみつくように立っている。そうしなければ立っていられないの

だろう。

「……矢倉におわす方が、きゅうにご所望なさいましたゆえ」あぐりは低い声で言った。

「お……おお」井戸の両脇に立っていた足軽たちは、慌てたようにあぐりを井戸へと通した。

城でもっとも古く、もっとも深い井戸である。

その井戸の最下部には秘密の横穴があり、城の前を流れる川の底に抜けられるという噂があった。いざというときの抜け道になっているというのである。真偽のほどは、だれにもわからなかった。

仮にそのような通路があるにしろ、完全に水の中である。その川までは人間の息が続く距離ではない。

あぐりは井戸に近づき、木の蓋を開け、中を覗き込んだ。

地の底に続いているような円形の闇がそこにあった。

この城は「夜」を奪われているのに地面に暗闇が置かれていることがあぐりにはふしぎに思えた。

しばらくすると、何十間も先に井戸の水面が小刀の切っ先のようにきらめいた。闇に眼が慣れたのだ、とあぐりは思った。

「……」

あぐりは前屈みになって、頭を近づけた。

「飛び込む気ではあるまいの」年長の足軽があぐりに声をかける。

「え……い、いえ」あぐりは我に返ったように身を起こし、振り返った。

「水を汲むなら、疾く済ませ、すみやかに立ち去られい」足軽は力なく言った。

あぐりは汲んできた水を湧かし、白湯にして呑んでいた。陽はすっかり落ちて、城を取り囲む数千のかがり火が、夜空を不自然に染めはじめる頃だった。

盆にわずかな食事とともに湯飲みを載せ、矢倉に向かって歩いた。

橙色と紫色が入り交じった異様な色の空に矢倉が黒くそびえている。その最上階の周りを、白い狐火のようなものがひらひらと舞っていた。敬虔な城

内の百姓たちは、このせいでけっしてこの矢倉に近づかない。
あぐりは連れの小者を入り口のところで待たせて、矢倉の中に入った。
於尚は、暗がりの中にいた。腹が大きくなってきたのできちんと座るのが苦しいのか、道ばたの石のように無造作に座っている。
「今日はこれだけしかございませぬが……」あぐりはそう言って、膳を置く。
「……」於尚は無言で首をあぐりに向けた。
「あぐり……」彼女は口を開いた。
「はい」
「……このごろ、宮田荘のことを思い出すのじゃ」於尚は言った。
あぐりはうなずいた。あぐりもまた、故郷である丹波の宮田荘のことを思い出さない日はないといってよかったのである。
「……『おんごくおどり』をおぼえておるか」
「はい」あぐりはこっくりとうなずいた。
「おんごくおどり」とは俗称である。正式な名は、あぐりも知らない。鎌倉

に公方さまがいて権勢をふるっていたころから伝わる「念仏踊り」の一種で、宮田荘のあたりでは七月の盂蘭盆会のときに、鉦や太鼓を叩いて歌いながら通りを練り歩く行事だった。

「――ぼんぼんぼんの十六日に、おーえんまさまにまいろとしたら――」突然、於尚は歌い出した。細く、かすれた声だった。

「――数珠の緒が切れて、はなおが切れて、南無釈迦如来手でおがむ」

あぐりは、於尚の歌声に口の中で唱和していた。月に六度の市がたつ広場に向かって、子どもたちがはしゃぎながら通りを進んでいく光景が浮かぶ。於尚とあぐりが八つか七つのころだった。夜ともなるとふだんは真っ暗な街角にはかがり火が赤々とたかれていた。ちょうど、外のように、人の明かりが夜を明るく照らしていたのである。

「……あのころは……楽しかったのう」

「はい」

「あのころに、戻りたい」於尚は吐き捨てるように言った。

あぐりはだまっていた。

「いつまで、ここにいなければならぬのか……」於尚はつぶやくように言う。

「そ、それは……でも、いずれ、ご家老さまのお許しもでるでしょうから――」

「ちがう」於尚はあぐりの言葉をさえぎった。「ここは、この矢倉のことではない。この城のすべての曲輪のことじゃ。この城にいる人々は、いつまでここいいなければならぬのかと問うておる」於尚は言った。

「わかりませぬ。いくさのことは……。それより、お召し上がりくださいませ」そう言いながらあぐりは膳を於尚に向かって押し出す。

「なぜ、食わねばならぬ」

「姫様のため、お腹のお子のため」

「やがて母子ともども殺される身なのに、なぜ食わねばならぬ」

あぐりはしばらく考えて、口を開いた。

「――そのお子は、たとえ、この城が落ちたとしても、落ち延びて、別所の家をふたたび興すお方になるかもしれませぬ。ですから――」

「ならば、この腹の子はキリシト（救世主）かっ」なぜか於尚はふるえだす。「尚は尊きビルゼンのマリヤかっ」
「で、デウスの教えのことはわかりませぬ、ですが」
「もうよい」於尚は箸を手に持った。そして、干し飯の粒を口に運ぼうとしたせつな、「あぐり、おまえもすこしお食べ」と、いつものように言った。
「いえ」あぐりもまたいつものように断る。
「なぜじゃ。そなたもこの城の人々の救い主になるかもしれぬのに！」
於尚はそう言い放つと、突然笑い出した。
あぐりが階段を下り、矢倉の戸を閉めても、於尚の甲高い笑い声が聞こえてきた。

あぐりは主殿の脇にある長屋の中に入った。他の女房たちはすし詰めなのに、その部屋はあぐり独りだった。みな、尚姫の侍女のあぐりのことを気味悪がっているのである。小袖をかぶり、氷のように冷たい藁の上に横たわると、壁を隔てて他の女房たちがささやきあう声が聞こえてきた。

「……孫右衛門さまから、書状が届いたそうじゃ……」
「……やはり……かのう……」
女たちの低い声が、かすかな地なりのように床や壁をふるわせている。あぐりは目を固く閉じて耳を澄ませた。孫右衛門という人物が殿に重大な申し出をしたということを話しているらしい。
あぐりは闇の中で「孫右衛門」という名前を転がしている。記憶の中でかすかにうずくものがあった。「とうとう、やってきたのだ」という思いが、ゆるやかな波のように押し寄せてくる。
別所孫右衛門という人物に、なんの意味もない。殿の叔父にあたる人物で、かつては別所家の執権であった。「かつては」というのは、いまは織田方についてるからである。おそらく羽柴筑前守に命ぜられて、この城の開城を勧めてきたのだろう。
だが、そのことになんの意味もない。だが、身体中の血が、風に吹かれる葦のようにざわめいていた。

年が、明けた。
天正八年である。
城内はもちろん城を包囲している羽柴勢にも、正月らしい華やいだ雰囲気はまったくない。
暮れから年明けにかけ、別所家の親族と一部の者を除いてはまったく食事が与えられないことになった。飢えた数千の人々は、曲輪の雑草すら食い尽くし、草の根や虫を争って探していた。むろん城内で飼われていた牛馬はとうの昔に食い尽くしているし、まぐさもとっくに人の腹の中に消えている。
水は一日に湯飲みで三杯。とうてい空腹を紛らわせることはできない。
担ごうにも力が出ないのか、空壕どころか、狭間の陰にさえ死体が捨てられるようになった。そのせいで、死臭が絶えず城内にただようことになった。冬だからまだましだ、という者もいる。これが真夏であれば、城兵たちは臭いで音を上げることになったというのだ。
彼らの言うとおりだ。あぐりは地の底に溜まった肥のような死体の腐った臭いの中を矢倉に向かって歩きながら、そう思う。この臭いが何倍も強かっ

たら、いっときも耐えられるものではない。
「……敵方が、あわただしい」
於尚は暗がりの中でつぶやく。大きく突き出た腹を何度もなでながら、明かり取りの向こうに顔を向けている。
「いよいよ、攻めてくる。終わりじゃ……なにもかも」於尚は言った。
あぐりが答えないので、於尚は振り向いて断じた。そして、あぐりの顔を見上げる。於尚の顔は、まるで泥団子をへらでそぎ落としたように、頬の肉がこけていた。昨日から比べても目に見えるほど痩せている。
「どうした、あぐり。なにかあったのか」
「い、いえ」あぐりは首を振り、膳を置く。
膳の上には、白湯の入った湯飲みと皿が一枚。その皿の上にはひとつまみの蒸した粟が盛られている。平時であれば、およそ食事というべきものではない。が、水しか与えられない足軽や百姓たちとは雲泥の差であった。
「おまえ、いくらか食べぬか――」
「いりませぬ」あぐりは於尚の言葉をさえぎるように言った。

「この腹の子が食うのじゃ」於尚はそう言って、一気に粟を頬張り、白湯を飲み干す。

於尚の言うとおりだった。正月の六日早朝、羽柴筑前守の率いる軍勢は、この城の背後の守りというべき宮の上の支城に押し寄せてきたのである。

あぐりは長屋の前をよたよたと走り抜ける足軽の叫び声で、それを知った。

「ま、まるで、草をなぎ倒すように皆、斬られたンじゃ」

その男は具足も着けていなかった。冬だというのに日干しのようになった素肌の上に湯帷子一枚という格好である。着物の背中には血しぶきがついていた。

足軽大将の怒声が響くなかを、あぐりは悄然と歩いていた。武士でないあぐりにも、いまこの城が置かれた立場がわかる。攻め方が押さえたのは、城のすぐ南にある大宮八幡宮の裏山に築かれた支城で、本城を見下ろす二三町の位置にある。この城は、もはや首根っこを摘まれた猫のようなものだっ

た。
　敵方の武士の旗指物がいやに間近に見える、足軽たちがかすれた声でそうささやきあうのが聞こえた。あの旗がこの本城に押し寄せてくるのに、さほどの日にちはかからないだろう。あぐりは視線を落とし、下を向きながら、尚姫のいる矢倉に向けて歩いていた。
　曲輪の中にいる誰もがうつろな目をしている。「決戦が近い」といった高揚感など、どこにもない。むしろ、一年あまりにもわたる籠城が終わろうとしているという静かで、ほの暗い興奮が、人々を包んでいるかのように見えた。
　市の終わりに似ている。あぐりはそう思った。にぎわいが去り、作物や商品を片付けた後に、冷たい夜風が広場を吹き抜けていく、そんな感じがした。
「いよいよじゃのう」
　幽鬼のように痩せているのに腹の突き出た於尚の声は、なぜかつややかだ

った。
「はい」あぐりはうなずいた。
羽柴勢はすぐに攻め込んでは来なかった。本城の目と鼻の先まで来ても、一年前と同じように注意深く支城をつぶしていくという、慎重を極めたいくさぶりである。
彼らが動いたのは、六日後の十一日だった。
夜が明けてまもなく、本城の東から煙が上がるのが見えた。
「鷹乃尾山が燃えておりますーっ」
物見の声で、あぐりは目を覚ました。彼女は暗がりの中で、まばたきを繰り返す。今日、羽柴勢がここにやってくるのだろうか。あぐりは身繕いをして、外に出た。そのころには、本城の東にある鷹乃尾山の支城は落ちていた。支城から逃げてきたわずかな兵たちが、本曲輪の中にもつれ込むように入ってくる。支城を護っていた別所彦之進の側近たちだった。
別所彦之進は、城主の弟であり、そしてまた於尚の夫でもある。

あぐりは女房たちに混じり、つま先立ちをするようにして彼を見た。兄である殿に似て、涼やかな目をした若者である。頬はこけているが、大股で主殿まで歩いていく姿は、りりしいものだった。

その後ろ姿が屋敷の中に消えるまで、あぐりはその姿を目で追う。

あと数日もせずにこの城は落ちる。そうなれば、殿をはじめとして、あの方も、生きてはいないだろう。あぐりはそう考えた。ふいに、きりきりと突き刺すような喉の渇きを覚えた。

残る支城は、本城の東にある城だけになった。おととし築かれたばかりであるため、「新城」と呼ばれている。その城を守っているのは別所家の執権で殿の叔父にあたる別所山城守であった。

そして、その日のうちに新城も落ちた。最後に残ったのは城の中心だけである。曲輪の中は各支城から逃げてきた武将らや足軽らでいっぱいだった。具足を付けているのは、わずかでも食事を与えられていた別所家の親族や譜代の家臣たちだけであった。みな一様に頬がこけ、疲れ切った目をしてい

る。
もはや「いくさ」とは呼べぬ。いくさは、人どうしが命を取り合うものだ。
あぐりは他の女房たちとともに彼らの様子を眺めながら、ぼんやりと考える。目の前の侍たちも、周りにいる女たちも、みな餓鬼のよう痩せ、目だけをぎょろつかせていた。まるで殺されるのを待つ鼠の群れのように見えた。

夜になった。
羽柴勢の松明は、ほんの間近で焚かれているように、いつもよりさらに明るく城内を照らしていた。あぐりはまるで昼のように明るい曲輪の中を、小者をつれてよろよろと歩いている。彼女の背後には、羽柴勢の灯す明かりに対抗するかのように盛んに飛び回る鬼火が舞っている矢倉があった。
「待て」
あぐりはぴくんと立ち止まる。
彼女を呼び止めたのは、別所彦之進だった。あぐりはその若者に向き直

り、深々と頭を下げる。が、そのまま頭を上げることができない。正面からその若者の顔を見ることができないのだ。

若者が小者たちを下がらせる声が聞こえた。あぐりは、この広い曲輪に自分とその若者の二人しかいないような、奇妙な感覚にとらわれた。

「於尚の腹の子に天狗が取り憑いているのは、まことか」彦之進は低い声で言う。

あぐりは黙って垂れた頭を上下させる。

「おまえが、於尚の世話をしているのだな」

あぐりはふたたび頭を揺らす。

「顔を上げよ」

あぐりは彦之進に言われるままに、顔を上げ、彼を正面から見た。どのような表情を浮かべてよいのかわからないために自分は泣いているような怒っているような表情をしているのだ、と意識したとたん、頬にかあっと血が上った。このまま数百万の天狗たちにこの身を引き裂かれてしまえばいいのだ。あぐりは、身もだえするほどの恥ずかしさを覚える。

「あの光は、天狗のたぐいだというが、まことか」彦之進は言った。
あぐりは目を細めて正面の若者を見据えた。畏れに似た感情があぐりを通り過ぎてゆく。
「どうした」
「はい」あぐりはうなずく。
「於尚の腹の中にいるのは、大天狗だと言ったそうだが、まことか」
あぐりはほんの一瞬ためらったあと、ゆっくりとうなずいた。
「……ならば、斬らねばならぬ」
彦之進は低い声でそう言った。端正な顔に険しい表情を浮かべている。あぐりは、若者の堅い表情に見とれていた。怖い。怖いが美しい。むしろそのような顔をした男にむしろ自分が斬られたい、と思ってさえいた。
「お、おまちください」
あぐりは彦之進が矢倉に向かって進もうとしたので、我にかえった。彼女は彦之進にそっと手を差し伸べた。彦之進のたくましい胸に触れそうなほど近くに手があった。かすかにその男の熱が感じられるような気がする。あぐ

りはぼうっとなった。
「姫様に取り憑いた物の怪は、このあぐりが」彼女はあえて自分の名を出した。「なんとかいたします。どうか――」
彦之進は尖った顔であぐりを見ていた。斬られるかもしれぬ、とあぐりは思った。いまこの若者に斬られるかもしれぬ、斬られるかもしれぬ、あぐりのこころの中でその言葉が天狗たちのように踊り狂う。あぐりは彦之進の腰に帯びた太刀の柄を見つめた。
それは、男の猛った一物のように見えた。それは、尚姫様を身ごもらせたもの。そのようなことを思いつく自分は狂ったのだと、あぐりは思う。その狂った自分が目の前の若者に抱きついたりせぬように、彼女は地面に身を投げて平伏した。
「……主人の命乞いか」彦之進は言った。
「はい」あぐりは嘘をついた。
「そのようなことをせずともよい。……明後日にも、於尚は死なねばならぬ。腹の子もろとも、な」於尚の夫は、かすれた声で言った。

「羽柴勢が攻めてくるのでございますか」
「いや、殿をはじめとする別所の一族の命と引き替えに城内の者どもの命を救うと、筑州（羽柴筑前守）が言ってきたのじゃ」
「え……」
「さきほど、評定があった。伯父の山城守どのがはげしく異を唱えておったが、殿はその申し出を受けるとご決断なされた。つまり、わしらが腹を切る。そののち、この城を明け渡す」
「……」
別所一族の女子どもは、夫や父の後を追わなければならない。いや、むしろ先に死ぬのがあたりまえであった。そして、別所の子を身ごもっている於尚は、とくに、死ななければならない。気がつくと、あぐりは地面の土をにぎりしめていた。
「……彦之進さまと、なにを話しておったのじゃ？」
暗い矩形の中心で、於尚は言った。あぐりは黙って座っている。

「……答えぬか」
「尚姫さまと腹のお子は息災か、と――」
「嘘を申せ」於尚はあぐりの言葉をさえぎった。
「ここで一族がいさぎよく自決しなければならぬのに、妙なものに取り憑かれたこの尚が邪魔だと申しておったのだろう」於尚はいらいらとした口調で言った。
「それに、『息災』などという言葉は、いまの尚には不要じゃ……神仏のご加護は要らぬ。われらをここから救い出してくれるデウスさまのみがおられればよい」於尚はそういながら、突き出た自分の腹を撫でた。ふと思い立ったように、腕をゆっくりと上げ、明るい窓を指さす。
「あぐり、外を見よ！　ここがどこか、そなたにはわかるか」
「どこか……と申しますと……東播磨の――」
「たわけ、ここは、この場所は『ぶるがたうりよ』じゃ」
於尚は、あぐりが耳にしたことのない言葉を口にする。
「おまえも、この尚も、彦之進さまも、殿も、北の方も、尚を矢倉に閉じ込

めた肥前をはじめとする家老どもも、百姓も足軽も女房たちもみな、じつはこの『ぶるがたうりよ』に捕らわれておるのじゃ」於尚の声は震えていた。
「その、『ぶるがたうりよ』とはなんでございますか」あぐりは言った。
於尚は、顔が痩せてきたことにより突き出るように見える目を、あぐりに向ける。
「われら科（とが）の奴（やっこ）を、炎の力で清める場所じゃ。今朝がた、イルマンどのの言葉を思い出した。我らはみな、とうに死んでおるのじゃっ。……ここが『ぶるがたうりよ』であると考えるなら、すべてのつじつまがあう。この、矢倉も、曲輪も、堀も、城も、そして、目と鼻のさきで、われらの窮状をあざ笑うカラス天狗どものごとき羽柴の軍勢も……。――どこへ行く？」於尚は立ち去ろうとするあぐりに声をかける。
「……もはや、お持ちするなにものもございませぬゆえ」
「では、なぜここに来た」
「日に二度は尚姫のお顔を拝見したく」
「はよう去ね」

「別所一族が腹を切り城を明け渡す」という噂は、一日にして城内を駆け巡った。

生きてこの城を出ることがあるのかもしれない。一部の武士をのぞいては、城内のほとんどが半信半疑でその噂を口にしているようにあぐりには思えた。

この一年あまりで、近隣の村や城下町から城に逃げ込んでいた人々の半数が飢え死にしていた。この城の外に出られるとしても、森の木々のようにびっしりと並ぶ敵方の指物のさなかに放たれて、どう生きのびよというのだろうか。かろうじて生き残った人々はそのように考えているのだろう。

もはや、城は城として機能してはいなかった。朝になると人々は目を開けるが、それだけだった。何人かは横たわったまま死に、残る何人かは何かにつかまってよろよろと立ち上がり、持ち場へと歩く。持ち場といっても何もするでもなく、座っているだけである。そして、そのうちの何人かはそのまま動かなくなっていった。

その日の夕刻、大手門が開かれた。
開城が早まったわけではない。羽柴方からの使者を招き入れるためであった。立派な具足を付けた足軽大将格の武士を先頭に、小者たちが荷駄車を押してくる。どのような位のものでも十分に兵粮が行き渡っているのだろう、土気色の肌を見慣れたあぐりには、一様に血色がよく見える。
彼らが運んでいるのは、二十個ほどの柳樽と桶であった。桶の中身は、みごとな鯛をはじめとする魚介である。羽柴勢が押さえている明石の魚住の泊から揚げられて生きたまま運ばれたものだろう。どれも新鮮だった。
わけもわからぬまま、生き残った女房たちは魚介の調理の手伝いを命ぜられた。数十日もほとんど使われていなかった厨房を使って、酒肴の準備が整っていく。つまみ食いを監視しているつもりなのか、数名の重臣たちが厨房に入り込んでいる。
「最期の酒盛りじゃとよ」
ひとりの女房がささやくのが聞こえた。明日の朝、別所一族は城兵の命を

救う代わりに腹を切る、と。その意気に感じ、羽柴筑前守が主従の別れをせよと送ってきたというのだ。

明日の朝――。

「意外に早かった」と、あぐりは思う。明日になれば、尚姫さまも、殿も、北の方も、二親に似て美しい子どもたちも、彦之進さまも、死ななければならないのだ。そして、あの城門は、開け放たれる。

日が落ちると主だった武将たちが主殿に集められた。酒宴を催すというのである。

宴が始まる直前に、あぐりは筆頭家老の三宅肥前守に呼ばれた。出家したのか、肥前守はいつのまにか剃髪している。

「……『矢倉の方』には、そのほうが伝えて欲しい」

周囲に人のいないことを確認した上で、筆頭家老は、あぐりにそうささやいた。「何を伝えるのか」ということは、家老の目でわかる。

「別所彦之進が腹を切る前に自らの手で命を絶て」ということを告げよ、と

いうのだ。
「本来ならば、このようなことは北の方か、別所家の執権たる山城守の奥方か、あるいはこのわしが伝えるべきものなのじゃが――」肥前守はためらう。
「このような家の大事に、よからぬことが起きては、赤松円心ゆかりの別所家の名を末代まで汚すことにもなろう。……まだ若きそのほうには荷が重いだろうが、たのむ」肥前守は平家蟹のような顔を曇らせて言った。
あぐりは黙ってうなずいた。
肥前守はあぐりに短刀を手渡した。

あぐりは供も連れずに矢倉に向かって歩いていた。本城の周りをぐるりと取り囲んだ羽柴勢の光がいっそう明るく、戌の刻をとう過ぎているのに、曲輪の中はまるで黄昏どきがいつまでも続いているようである。
十数間離れた主殿から、半年ぶりの酒に酔った侍たちが歌うだみ声が聞こえてきた。播磨に古くから伝わるかぞえ唄のようである。猥雑な唄だった

が、あぐりには命の限りに鳴く秋の虫の音のように聞こえた。
あぐりは膳を持っている。尚姫のいる矢倉に膳を運ぶのは久しぶりであるような気がした。
土の上に自分の影が長く伸びていた。その影は、槍のように尖って、矢倉へ突き刺さるようである。
矢倉の周りには相変わらず狐火のような細かな光がしとしとと粘り着くように舞っていた。このように陣が近くては、羽柴の物見櫓からもあの狐火が見えるかもしれない。あぐりは尚姫がいる矢倉の前に立ち、その光を見上げた。
いくつかの光の固まりが、ゆるゆると降りてきて、あぐりの足下に水のように徐々に溜まっていく。
狐火の水たまりから、すっと一本の光の筋が上に向かって突き出てくる。その筋は二尺ほどの長さで止まり、ぷるぷると震えだした。しばらくすると、それは童の形になった。足があり、手があり、ぼんやりとした顔がある。顔の中には、二つの目のようなものが見えた。

「……」それは口に当たる部分を開閉し、空気を震わせる。人間の言葉には聞こえない。大地の底がきしむようないやな音がする。

気がつくと、人の形は消えていた。あぐりは矢倉の戸を開け、中に入った。

「……ぼんぼんぼんの十六日に……おーえんまさまに……まいろとしたら……」

於尚は歌っていた。

あぐりの足音は聞こえているはずなのに、床の一点に目を落としている。

「尚姫さま……」あぐりは声をかけた。

「……じゃが、地の底に大閻魔などおらぬ。西方に阿弥陀なぞがおらぬように……」於尚はあぐりに顔を向けぬまま、そう言った。

「これを……」あぐりは、膳を於尚の前にとん、と置いた。皿の上に盛られた鯛の刺身である。その魚の身は薄暗い矢倉の一室で、美しい螺鈿のようにてらてらと光を放っていた。

於尚は皿の上のものに視線を落とした。
「最期の宴、というわけか……」於尚はつぶやく。
「……」あぐりは答えなかった。
「羽柴筑前守の諱（いみな）、なんと申したかのう……」
突然、於尚はは顔を上げ、天井を見上げた。思い出すようなしぐさだった。
「さて……」あぐりは首をかしげる。身方の武将たちの諱すらほとんど知らぬのに、敵方の武将の諱を侍女が知るはずもない。
「ああ、たしか、秀吉とかいった。……父上がおっしゃっていたのを聞いたことがある。秀吉、秀吉……秀吉……。こうやって唱えておれば、末代まで呪うことができようか……。とはいえ敵方の将は憎くもなし」於尚は今様のように節をつけて言った。
あぐりは黙って於尚を見つめている。
「……十六で嫁いでからずっとここに、この『ぶるがたうりよ』に、閉じ込められていたのは、秀吉のせいではない。科（とが）のせいじゃ……。……この尚

は、なんの科を犯したというのじゃろう。あぐり、そなた、わかるか」
「わかりませぬ」
「尚にもわからぬ」そう言って於尚は笑みを浮かべる。「……イルマンは、人は生まれつき科を背負うておると言うた。それがなんの科かは、教わる前にここに閉じ込められたのじゃ……」於尚は言った。
あぐりは於尚に気づかれぬように帯の後ろに挿した短刀の柄をそっと触ってみた。それはたしかにそこにあった。あとはそれを差し出し「これで死んでくれ」とあるじに言うだけなのである。
「あぐり、肥前守に頼まれてきたのか」於尚は言った。
「……はい」あぐりはうなずいた。
「彦之進さまや殿は、いつ腹を切るのじゃ」
「肥前守さまから聞いてはおりませぬが、城内の者は明日、申(さる)の刻と申しておりました」
「おなごどもはそれより前に死ね、ということじゃな」
あぐりはうなずけなかった。ただ黙って皿の上の鯛の切り身を眺めている

だけだった。その身は美しく、食物とは思えない。が、まぎれもなく食い物である。それも下女の分際では普段口にすることのできない極上の食物である。空腹を通り越し、激しい痛みが五臓をかき回しているような気がした。

「あぐりも、姫の後を追います」

誰かが、妙にかすれた声で、そう言った。この矢倉の一室には、二人しかない。於尚ではないとすると、自分がその言葉を発したのである。それに気がついたとたん、身体中が粟立つ。あぐりは思わず目を伏せた。床についた自分の手が震えていた。

「まことか」

「はい」後には引けなかった。宙に向かってはき出した言葉は取り戻すことができないのだ。

「そうか」

あっさりとうなずく於尚の様子が、なぜか空腹感と同じようにあぐりのこころをちりちりと炙った。

「思えば、いままで、よく仕えてくれたのう」

「はい」

「……一昨年（おととし）、いや一昨昨年（さきおととし）の、丁亥（ひのとい）（天正五年）のことをおぼえておるか」於尚は遠くを見るような目つきをして言った。

「はい」あぐりはうなずいた。

於尚の考えていることが、手にとるようにわかった。あのことしかない、と思った。

その年の長月のつごもりのころから翌十月の初めかけて、夜空に大きなほうき星が現れたのである。於尚とあぐりはほうき星を見物するために、夜になるのを待って、何人かの供を連れて宮田荘名内の小山に登ったのだ。太刀魚の腹のようにぎらぎらと輝く客星の光は、西の空に長く伸びていた。於尚とあぐりは夜が更けるまで肩を並べて、その星を眺めたのである。

「……あのまがまがしい星は、天狗どものいう妖霊星（よろぼし）だったのじゃ。あるいは、この尚に『播磨に嫁ぐな』という、デウスさまのお告げだったのかもしれぬ。……いまにして思えば、あれは、丹波の西、この播磨に突き立てられ

た匕首のようであった」

於尚は、いまもその星が西の空に輝いているかのように、暗い矢倉の中で西の方角に顔を向けている。あぐりは、幼い頃から姉妹のように育てられたあるじの痩せた横顔を見つめた。と、血の塊が喉のあたりに溜まっているような気がした。

「……我らも殿と同じように、主従別れの宴をいたそう」於尚は低い声で言った。

「姫様……」

あぐりは思わず声をかけた。しかし、なにも言うべき言葉が見つからなかった。ただ、腕を付け根から失ったような、深く冷たい飢餓感があるだけだった。あるじの言葉にこころを動かすには、腹が減りすぎていた。あぐりは、膳に添えられた漆塗りの箸を手に取る於尚の細い手に、じっと視線を据えている。

於尚は、皿の上に盛られた刺身に箸を向けた。明かり取りから差し込む光が黒い箸の先を、鉄針のように輝かせた。その先端が魚の切り身に届きそう

なせつな、於尚は手を止め、あぐりに顔を向けた。
　あぐりは蛤のように身を縮こまらせた。床についた自分の両手で耳をふさいでしまいたかった。
「……気がつかなかった。あぐり、おまえもすこし食べぬか」於尚はそう言った。
「い、いえ。それは、わたしのようなものがいただくわけにはいきませぬ」あぐりは叫ぶように言った。そして、頭の中で液体のようなものがちんちんと音を立てるほど、はげしく首を振った。
「そう申すな。今夜限りのことじゃ。明日の夜には、尚はこの世におらぬ」尚はあぐりに近寄り、強引に彼女の手に箸を持たせる。
　あぐりは皿の上のものを見下ろした。皿の上で輝くものに、箸をつける。一切れ口に運ぶ。食べ物らしきものを口に運ぶのは六日ぶりであった。いままで味わったことのないような甘みが、口の中にひたひたと広がった。それは、矢倉の外を舞う狐火たちのようにあぐりの全身にまとわりついた。
「はふっ。はふっ」気がつくとあぐりは皿の上の切り身をむさぼるように口

の中に放り込んでいた。
「ま、待て」
あぐりは両手に皿を持ったまま声のした方向に顔を向けた。於尚と目が合う。於尚は唖然とした表情を浮かべている。そして、それがみるみる怒りの表情に変わっていく。
「みな食えとは申してないぞ」
於尚の声であぐりはようやく我に返り、皿を膳の上に置くと床に額をこすりつけるようにして伏した。
皿は、いつの間にか空になっている。
あぐりは猛烈な吐き気を感じていた。胃が別の生き物のようにのたうちまわっていた。飢餓状態のところに突然食物を放り込んだためらしい。
「なぜ食うた。なぜじゃ」
於尚はよろよろと立ち上がり、壁に立てかけてあった矢柄の数本を手につかむと、あぐりの背中をぱしぱしと打った。痛くはない。が、一打一打に込められた於尚の怒りと悪意が赤く燃えた火箸のようにあぐりを責め苛んだ。

「おまえは、むかしからっ……いじきたないっ」
於尚は、大声でののしりながら、あぐりを打ち続けた。乳母の子として、ほぼいっしょに育ってきたにもかかわらず、二人の間には埋めようのない大きな隔たりがあった。あぐりは暴れる胃を押さえつけながら、床につけた自分の手を見つめていた。於尚と同じ十六あまりなのに、まるで老婆の手のように見えた。
その手がぶるぶると震えている。次のせつな、あぐりの脳裏からすべての色が消えた。憶えているのは、帯の後ろに挿した短刀の鞘が、軽く尻に触れたという感触であった。

恐ろしい獣が、はあはあと息をしている。
矢倉の外を舞っていた鬼火たちが、部屋の中に入り込み、我が物顔で這い回っていた。まるで大天狗の誕生を待つかのようである。その大天狗の仮の住まいであるはずの於尚が、床の上に仰向けに横たわっていた。目を開けたまま、天井を見ていた。あぐりはその顔に、赤地の小袖を掛けた。於尚が気

に入っていた小袖である。
あぐりは狭い階段を下りた。
矢倉の戸を閉めると、本殿から唄と手拍子が聞こえてきた。四角い本城の曲輪の中で歌っている彼らの周りを、秀吉とやらの軍勢が、松明を持ち、びっしりと取り囲んでいるのだった。
その松明の灯りの幾重にもなった隊列は、籠城する人々を攻め滅ぼすためというよりも歌垣に集う人々のように、のんびりとして見えた。
すり鉢の底にいるようだ。と、あぐりは思った。神でも仏でも、デウスでもない輝く何者かが、この城の中にばらまかれた芥子粒をすりつぶしている。そのようなふしぎな考えが、あぐりの心の中を占めていた。
そのとき、あぐりは前かがみになって、胃の中のものをすべて吐いた。

薄暮のように明るい真夜中の曲輪を、あぐりはよろよろと歩いている。ひどく喉が渇いていた。
「……あぐり」

低い声が響く。あぐりはゆっくりと声のした方向へ半身に構える。
三宅肥前守であった。
「その血は……『矢倉におわす方』は、どうなされた」
「尚姫さまは……ご生害なされました」あぐりはかすれた声で答える。
と、肥前守の視線の先が、下に降ろしたあぐりの手に向いていた。その手には、いまだに短刀が握られている。その視線に気がついたあぐりは、手を左右に振った。短刀は、地面に落ちる。
「うむ……。じゃが、『矢倉におわす方』は明日の朝、亡くなられる」肥前守は宣言するように言った。
「辞世もみごとに詠まれた後にな」
「……はい」
「後の世に、城内の者を救うために命を投げ出された誉れある一族のおひとりとして、名を残されることじゃろう……お腹の中に巣くうておったものは、どうした？」
三宅肥前守がそっと手を動かし、腰に帯びた太刀の柄に触れようとしてい

るのに、あぐりは気がついた。だが、どうでもいい、とあぐりは思った。童の形をした霊界のものが身体じゅうを焼いているのに、これ以上何がおきても、かわりはない。

彼女は目の前の初老の武士をにらみつける。そして、右手を胸に当て、

「ここに、ございます」と答えた。

三宅肥前守は素早く抜刀し、あぐりの肩から腰のあたりまで一気に斬りおろした。

あぐりは太刀の銀色のきらめきに目を凝らしていた。その光は、細い月のように円弧を描いて自分の身体と交差していた。だが、次のせつな、その光は消えた。なぜか痛みはなかった。

肥前守が驚きの表情を浮かべている。太刀の柄を投げ捨て脇差しに手をかける様子が、魚の鱗の一枚を透して見るようにぼやけて見えた。あぐりその男に触れようと両手を伸ばす。肥前守は何度も叫びながら斬りつけようとして刀を振り回しているようだった。

彼女はかまわず足を前に出す。矢倉の周りを舞っていたような狐火がまる

で生き物のようにあぐりの身体にまとわつく。ひどくぼやけた風景の中を、筆頭家老が太刀を投げ捨てて走り去るのが見えた。

あぐりはのろのろと歩き続ける。

井戸が見えた。城の前に流れる川に通じているという井戸である。

見張りはいない。

あぐりは井戸に近づき、中をのぞき込む。昼間のように明るい夜なのに、その井戸の中には漆黒の闇があった。城の外に通じているとはとても思えない。あの闇の向こうには何も無いにちがいない、とあぐりは思った。

「なんの科（とが）かは、わからぬのじゃ」

あぐりが井戸から顔を上げると、井戸の脇に於尚が立っていた。秀吉の松明が於尚を灯心のように明るく燃やしている。乱れた黒い髪の間から、於尚は、責めるような視線をあぐりに向けた。

「……科（とが）がわからなければ、炎によって清められようもない。永久（とわ）にこの『ぶるがたうりよ』で苦しまなければならぬ。この城で過ごした時を、

なんども繰り返すさだめじゃ」於尚は言った。
「いや……」あぐりは首を振る。
「ここの暮らしを、あんがい、好んでおったろう」
「そのようなことはありません」
「なぜじゃ。彦之進さまもおるというのに。おまえ、彦之進さまに懸想しておったろう」
「おやめください、尚姫様。そのまま、じっと、死んでおってください」
あぐりの声は老婆のようにかすれていた。彼女は出口を探すように、井戸の中に身を乗り出す。四角い枠の中に、丸い闇が広がっている。あぐりは井戸の中の暗闇に向かって、吸い込まれるように身を投げた。

子どもが、四角を見つめている。
男の子だった。保育園の制服である水色のスモックが、ぶかぶかなうえ

に、ろくに洗濯をしていないのか灰色の汚れがうっすらとついている。今年五つになるが、三歳児に見えた。発育が遅れているようだ。枯れ枝のように細い腕には、いくつかの痣がついている。二十歳そこそこの母親は「よく転ぶのだ」と言うが、保育園側は虐待を受けているのではないか、と考えていた。

傾いた夏の太陽が、熟れた柑橘のように空に垂れ下がっている。オレンジ色の日差しが、街の真ん中にある小山の斜面を照らしていた。戦国時代、そこに城があったという。いまは、市有地となり、図書館や保育園が建てられていた。

その子は、正規の保育時間が過ぎ、他の子が帰り始めるやいなや保育園を抜け出して、園の隣にあるその場所にやってきた。

看板がある。この四角い枠の由来を書いてあるのだが、ひらがなすらわからないその子には、とうてい読むことができなかった。ただ、そこに「穴」が開いていることは知っていた。

「……翔くん、こないなとこで、なにしてるの」

若い女性の保育士が小走りに近づいてきて、その子に声をかけた。
「うん……『こっからでたあかんで』て、こいつらに、いいにきた」翔と呼ばれた男の子は、振り返らずにそう答える。
「ここから……て……」
保育士は眉をひそめる。市の教育委員会が建てた案内板の下には、四角い木枠に囲まれた古い井戸の跡があるだけであった。
「翔くん、この中にはなんもおらんよ……。これはむかしのお城の井戸」保育士は言った。
「むかしやない。いまもおるねん」その子はかすれた声で答えた。
「そ、そんなこと言わんと……園に帰ろ。母さん遅うなるて電話あったし、七時までお絵かきしょ」保育士はそう言いながら、男の子の肩に手を載せる。
「さわるなや」その子は肩に載せられた手を乱暴に払いのけた。
「翔くん。ここにおったの」べつの女性の声がした。
「園長！」若い保育士はその中年女性に振り返る。

「翔くん、行きましょ。ここ、暑いやろ」園長と呼ばれた女性はその子の正面で腰をかがめ、両手を肩に置き子どもの顔をのぞき込んだ。
「オバハン、口くさいわ」その子は言った。
「まっ」
園長は立ち上がり、若い保育士に小声でなにごとかまくしたて始めた。
男の子はその間もその史跡に視線を注いでいた。口元がもぐもぐと動かせながら。なにごとか唱えているようであるが、話に夢中になっている二人の女性は気づかない。
男の子は、天上の神が人間に命じるように右手を前に突き出した。
その腕には、母親と母親の「カレシ」が、火のついたタバコを押しつけた痕がある。そのあと、アパートの狭い浴室に閉じ込められたのだ。「シツケや」と母親とカレシは言う。「飯を食うのが遅い」というのだ。ろくに飯を食わせてもくれないくせに。だが理由は、なんでもいいのだ。ほんの数年しか生きていないにもかかわらず、その子にはわかっていた。怖がらせて泣き叫ぶのを見たいのだ。

右手をそっと開く。手のひらに夕日が当たって、ほのかに光った。
無数の、声がする。ここから出して、と泣き叫ぶ無数の声が、かすかに聞こえるような気がした。
男の子は心の中のざわめきに応えた。
そっからでたら、あかんねん。　はんせいするまでそこにはいっとき。

完

あとがき

この短編小説はフィクションです。
歴史小説ではなく、史実にある事物・人名等を拝借して構築した虚構であります。
秀吉に包囲された三木城主別所長治の弟の正室の名を「於尚」とした文献がありますが、キリシタンであったということはありません。
以下、参考資料を挙げます。

太閤記（小瀬甫菴）（国会図書館デジタルコレクション）
川角太閤記　（同右）
絵本太閤記　（同右）
別所記（翁草）（同右）
現代語訳　信長公記　（新人物文庫）
長崎版　どちりなきりしたん　（岩波文庫）